
The world/first

歩兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The world / first

【Nコード】

N6590E

【作者名】

歩兵

【あらすじ】

この世には、自分の住む世界とは違った世界——「並行世界」が存在する。「歪み」によって並行世界へと飛ばされた普通の高校生、岡島正人。——彼は果たして帰還できるか。そして、その世界を救えるか。稚拙な部分や誤植などが多々あると思いますが、どうぞよろしく願います。

プロローグ

プロローグ

平和で技術も発展しているこの世界。

人々は何不自由なく生活できている。

ただし、実はその裏で未だに草原や荒野が存在し、この世界で言う原住民のような生活をしてている世界もある。

ここではそれらを「並行世界」と呼称することにしよう。

その並行世界では、魔法や魔術といった類のものが生きている世界も存在する。

ただし、それらの存在を現代科学で証明することはできるのだろうか？

答えはNOだろう。

第一、並行世界に行った人間が戻ってきた実例がほとんどない。あったとしても、書物には記されていない。

また、戻ってきてても周囲の人間には相手にされないで、結局はホラ話ということになる。

更に言えば、他の世界に行くこと自体、そもそも珍しいのである。

中には並行世界の存在を知り、自ら行こうとするものもいるが、大半は失敗に終わっている。

つまりは、並行世界の存在を証明することはできないのだ。

ただ、一部の人間には「歪み」が感知できる。

歪みというのは、並行世界が壊れたりするなど、バランスが崩れた

時に起きる、地震のようなものである。

だが、この科学が進歩しすぎた世界でそれを感知できる人間は少ない。

さて本題に入る。

これから、その歪みのせいで並行世界に入ってしまった少年の話をしよう。

今から彼が行くのは魔法が生きている並行世界。

——彼は果たして帰還できるか。そして、その世界を救えるか。

The world / first

第1話：遭遇

第1話 遭遇

「ん……」

頭がやけに痛い。体も少し重い感じがする。いつから気を失っていたのだろうか。

「ここは…一体どこだ!？」

違和感に気付いて周囲を見渡すと、そこは森だった。

周囲はなにひとつない広大な草原で、僕が今倒れていたそこも草だ。辺りには先程まであったビルや、人の姿は一切見えない。

「さっきまで道路を歩いていたんだけどな…」

少し先まで記憶を戻そう。

僕、岡島 正人は大都市に住む普通の高校生。

当然ながら、このような自然に縁がある人間ではない。親の帰省先もこんな林が沢山ある訳でもない。

今日—といっても気を失っていたから正確な時間は分からないが—は休日だった為、友人と一緒に歩き回っていた。

ちょうど買う物があつたので電気屋にいくところだった。

特筆する程何か大きなことが起きた訳ではない。ただ単に生活していただけだ。

「これからどうしよう……」

ズボンについた土を払いつつ、周囲を見渡す。
人家もないし、行くあてもないのだ。
とりあえず気ままに歩いてみた。

「……こんなのって写真でしか見たことないなあ……」

林に所狭しと並ぶ巨木。
中には倒れているものもある。

「しかし、何もない……ってあれ？」

何か気配を感じた。
木が僅かに揺れたような――

「うわわっ!？」

――そんなことを思う暇も無かった。
僕の眼前には僕より少し小さいくらいの身長 of 獣が居た。
まるで猪のような獣だ。

（って……こんなことを思ってる場合じゃないっ!）

そうして、僕の逃避行は開始した。
足に自信があるわけではないが、とにかく走り続けた。
背後からは先ほどの猪が追ってきている。

「このままじゃ……」

追いつかれる。

どうにかしないと——そう思った次の瞬間だった。

風を切る音が聞こえたかと思うと、猪が突然倒れた。
その顔面に突き刺さっているのは……

「矢……？」

矢なんてもの、このご時世に存在はしていない。
しかし確かに刺さっているのは銀色の矢だ。
飛んできた方向は後方だ。その方向に僕は首を向けた。

「誰……ですか？」

「そりゃこっちのセリフだ。見ない顔だな坊主」

赤色の弓を片手に持った戦士が、そこに居た。

第2話：急転

第2話 急転

「まったく、最近の野郎共は軟弱だなあオイ」

僕を助けた男性は猪を射た後、僕のほうを向いていきなりこういつてきた。

しょうがないじゃないか、今ここに来たばかりなんですから——そう言おうとも思ったが、事態は理解してもらえないだろうと思い、話すのを止めた。

「ん？ よく見ると、見ない顔だな坊主」

男はこちらを向き、やっと異変に気付いた。

僕もその相手を見上げた。

男は赤いマントを羽織った金髪の男だ。赤いマントの中は黒いローブを着ている。

——しかし、特筆すべきは担いでいる弓だろう。

彼の背丈の2分の1はある。全体がマントの色と同じ、燃えるような赤。

「服装もなんか違うし……あ」

男は顎に手を置いて思念していたようだったが、何かに気付いて宙

を見た。

まさか、自分ですら分らない今の状況が把握できたと言うのか。それだったら喜ばしいことだ。

——けれども。

「ハッハッハ、俺達の組織に入りたい奴だな。人材不足だし、入ってもいいぜ！」

「ええっ！？ 違いますよ！」

「……じゃあ、何だって言うんだよ。普通の奴はまずこんな森には来ないぜ？」

男の喜んでいた顔が一変、疑念の顔に変わった。

「それが……僕にも分からないんです」

僕がそういうと、男は再び顎に手を置き考えはじめた。顔などは20代なのに、仕草や行動は40代だ。

「じゃあ、事情を話してもらおうか」

僕は普通の人間であること、そもそもこんな自然に縁がある人間ではないということ、

そして、この住人ではないなどということを男性に話した。

男性はそれを聞くと、一回頷き、

「ああ……大体掴めた」

僕は大いに喜んだ。出来れば一刻も早く帰宅したいのだ。
しかし、この希望は――

「が、まだ確信がある訳じゃない。俺達の組織のトップと合っても
らおうか」

――再度、絶望に変わった。

いい加減にしてくれ、僕は何の変哲もない一般人だ、そう言いたかった。

だが彼の真剣な顔を見てみると、そうはいえなかった。

「これから、どうするんですか？」

「言ったら、トップに合ってもらって」

場所は移り、果てしなく続く草原を今僕達は歩いている。

体力にあまり自信があるほうではないが、今のところはまだ余裕だ。

「そのトップと合って、僕は帰れるんですね？」

「……」

僕がそう質問すると、男は黙ってしまった。

もしかして帰れないのだろうか――そんな考えが僕の脳裏によぎる。
いやしかし、彼は事情が大体掴めたと言うし、そんなことはないだろう。

「ああ、ところで名を聞いてなかったな」

そう考えていると、男性が不意に声を上げた。
突然だったので驚いた。

「僕は岡島 正人。貴方は？」

「オカジマ マサト？ 変な名前だな。俺はヴィラン。ヴィラン・テイラーだ。ヴィランさんとも呼んでくれ」

自分の名前を変と言われるのは少々腹が立ったが、その後の名前を聞き驚いた。

彼は外国人だったのだ。いや確かに金髪だったりおかしいところはあったが。

「では、ヴィランさん、以後よろしくお願いしますね」

「ああ、マサト。よろしく」

いきなり呼び捨てにされた。

いちいち怒っては恐らくキリがないのでこのままにしておこう。

「よし、着いたぞ」

思ったよりかは早く着いた。

僕が見上げたそこは、物語でしか見たことのない、見事な宮殿だった。

「え……ここですか？」

「ああ、さあ行こう」

圧倒される僕を尻目に、ヴィランさんはどんどん歩いていく。

「ああ、ちょっと待ってくださいよ!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6590e/>

The world/first

2010年10月9日07時42分発行